

平成23年度入学式 学長式辞

愛媛大学長 柳澤 康信

本日ここに、平成23年度入学式を挙げるにあたり、愛媛大学を代表して、皆さんの入学を心から歓迎いたします。全国各地から、そして、外国から、あわせて1,991名の若々しい皆さんを愛媛大学の新入生として迎えることができました。

この良き日のために、ご多用にもかかわらずご臨席を賜りました各界を代表するご来賓の方々、愛媛大学校友会・同窓会代表の皆様、名誉教授の先生方に厚くお礼申し上げます。そしてまた、ご列席いただいた新入生のご家族、そして関係の皆様にも厚くお礼申し上げます。この良き日を迎えられる、お慶びもひとしおのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。

さて、新入生の皆さんはこれから愛媛大学での生活が始まります。皆さんの胸の中には大学生活に向けて、夢と希望が大きく膨らんでいると思います。大学での4年間、あるいは6年間は、皆さんが自立した責任ある社会人となるために、自分の適性や長所を発見し、生きる力を身につけるためのかけがえのない期間です。大学での日々の過ごし方によって、皆さんの将来は大きく違ってきます。皆さんがいま心に抱いている初々しい期待感・緊張感をこれからもずっと忘れずに、有意義な大学生活を送ってほしいと思います。

愛媛大学は、昭和24年に松山高等学校、愛媛師範学校、愛媛青年師範学校、新居浜工業専門学校を母体として文理学部、教育学部、工学部の3学部として発足しました。その後、昭和29年には松山農科大学を母体とする農学部、昭和48年には新設の医学部が加わり、現在では6学部7研究科からなる学生約1万人を擁する四国最大の総合大学に発展しています。この間、地域の「知の拠点」として、また世界的な学術研究拠点として、社会の知的・文化的水準の向上に貢献するとともに、さまざまな分野で多くの優れた人材を世に送り出してきました。

国立大学法人となった平成16年度に制定した「愛媛大学憲章」では、「学生中心の大学」「地域にあって輝く大学」の実現を目指すことを宣言しました。この理念の下で、これまで教育・研究・社会貢献・国際貢献においてさまざまな先進的な取り組みを行い、いずれの分野でも着実な成果を上げ、愛媛大学は地方の大学でもっとも注目される大学のひとつになっています。新入生の皆さんは、この愛媛大学に入学したことを誇りに感じて、胸を張って大学生活をスタートしてほしいと思います。

さて、皆さんは大学でどんな能力を身につけようと思っているのでしょうか。ここで少し立ち止まって、大学で学ぶ意義を考えてほしいと思います。

愛媛大学では、各学部や学科のディプロマ・ポリシーを定めています。ディプロマ・ポリシーとは、まだ聞き慣れない言葉かもしれませんが、「学生が卒業時に身につけていなければならない能力」を示した達成目標のことです。すなわち、大学の学位を授与されるためには、最低限どのような能力の修得が必要であることを示したものです。このディプロマ・ポリシーは履修案内や大学のホームページで見ることができますので、ぜひ自分の学部・学科のディプロマ・ポリシーに目を通して、自分が何を期待されているのか確認して下さい。

言うまでもなく、大学では高校までと質的に異なる高度な知識を獲得することが求められます。どの学問分野でも、そこには長い間に人類が行ってきた研究や実践や思索によって歴史的に蓄積されてきた「知識の体系」があります。ですから、自分の選んだ専門分野については「知識の体系」という深い森に分け入る必要があります。そこでは、深さを追求する体系立った学びが求められます。深い学びとは、新しい知識をどのようにして創造するか、そのために必要とされる基礎的な知識は何か、さらにどのような方法で真実に到達できるのかなどを学ぶことも含んでいます。

しかし、それだけでは十分とは言えません。それと同時に、視野を広げるために幅広い知識を獲得することも大切です。今日の社会では、個々の知識はすぐに古くなるので、必要な時に学び直さなければなりません。一生、勉強することが求められます。そのためにはなるべく自分の「間口」を広くしておくことが大事です。日本では、高校の早い段階で文系・理系に分かれるという悪しき伝統があり、そのため自分が履修しなかった科目に関する知識を知らないのは当たり前だと考えたり、その分野に背を向けたりする傾向があります。自分の将来を可能性豊かにするためには、文系・理系を問わず幅広い分野を積極的に学び、広い視野を確保しておくことが大事です。

もうひとつ是非とも皆さんに大学時代に高めてもらいたい能力は、「集団の一員としてうまくやっていく能力」です。具体的には、コミュニケーション能力、集団の中で自分がどのような役割を果たすべきか理解する能力、他の人と協力しながら物事を成し遂げる能力など、社会生活を営むのに不可欠なさまざまな能力が含まれます。教育社会学者の門脇厚司さんは、これとほぼ同じ意味で「社会力（ソーシャル・コンピテンス）」という言葉を使っています。「社会力」とは「人と人がつながり、社会をつくる力」と定義されています。従来、これらの能力は大人になる成長過程の中でさまざまな体験を通して「自然に身につくもの」と考えられていました。ところが、地域コミュニティがほとんど崩壊してしまった現代社会では、若い人たちは家族やごく限られた人とだけ緊密な人間関係を結びながら成長することが多くて、これらの能力を発達させる機会が十分に与えられているとは言えません。多くの若者が「自分は友達を作るのが苦手だ」と自己分析しているのは、そこらに原因があると思います。

社会の雇用状況がきびしくなっている今日、卒業後の就職先は学生や保護者にとって大きな関心事になっていますが、それでは企業はどのような能力を大学生に求めているのでしょうか？ 企業が求めているのは、単なる学力や専門知識だけではありません。企業が一番強く求めているのは「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」です。経済産業省は、これを「社会人基礎力」と表現しています。「社会人基礎力」には、「自分の意見をわかりやすく伝える力」「相手の意見を丁寧に聴く力」「意見の違いや立場の違いを理解する力」「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」などが含まれます。これらは、今申し上げた「集団の一員としてうまくやっていく能力」や「社会力」とよく似た能力です。

このような社会的能力の基礎的部分は誰もが生まれながらに備えています。「人間は社会的動物である」という言葉をよく耳にします。人類の祖先は何万年、何十万年の間ずっと群れ生活、集団生活をしてきたのですから、その子孫であるわれわれが社会的であるのは当然のことです。社会的であることはわれわれの遺伝子の中に深く刻まれ、われわれの本性（本来的な性質）となっているに違いありません。ここで問題なのは、これらの社会的能力は発揮する機会が少ないと十分に発達しないということです。社会的能力を高めるためには、集団や組織の中のいろいろな立場でさまざまな経験を積むことが不可欠です。特に、集団や組織の中で一定の役割を担い、責任をもって行動するという経験の積み重ねが大事です。

私が、いま、新入生の皆さんに求めたいのは実社会に出るまでに、このような経験を数多く積み重ねることです。学内・学外を問わず、さまざまな経験を積んで社会的能力を高めることができれば、自ずと社会が求める人材になっているはずです。今日、学生の就職活動（就活）は早期化、長期化しており、学生にとって時間的にも心理的にも大変な負担になっています。内定をもらうまでに、何十社もの企業から不採用の通知を受けたという話も聞きます。愛媛大学では就職支援を強化していますが、就活に長期間振り回されないためにも、まずは社会的能力を身につけて自分の総合力を高めることが大切です。

新入生の皆さんに大学生活の第一歩としてまず勧めたいのは、仲間作りや友だち作りに取り組むことです。具体的には、体育系サークル、文化系サークル、あるいは、ボランティア・サークル、NPOなど学内あるいは学外の団体や組織に積極的に参加することです。愛媛大学にはいろいろなタイプの団体がありますが、少なくともその1つに加入して、先輩や同輩そして教職員と一緒に活動する場を確保して下さい。

さて、皆さんが大学に入学するひと月足らず前に東日本大震災が起きました。皆さんはこのことを一生忘れないでしょう。皆さんがいま被災地や被災された人々に寄せる思いは深いものがあると思います。この気持ちは尊いものです。いま大事なものは、その

気持ちをいつまでも忘れないこと、そして自分が大学生として第一歩を踏み出せたことに感謝し、前向きに、そして真剣に生きることです。

皆さんの大学生活が「人と人との結びつき」の中で充実したものになることを心から願い、式辞といたします。